

---

# 流星のロックマン ~ Mamoro's STORY ~

S.PANDA

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

流星のロックマン〜Mamoros's STORY〜

### 【Nコード】

N4994I

### 【作者名】

S・PANDA

### 【あらすじ】

全ては過去と未来をつなぐために……

物語では語られなかったもう1つの戦い  
浦方マモロウの悲しい過去と戦いが

今、明らかに……

## 第1章 悲しみのbirthday(前書き)

結構、長くなる話なので気長にお付き合いください

## 第1章 悲しみの birthday

この物語は、星河スバルが生まれる十年前……十八歳になった浦方マモロウの話である。

二千〇x年

あの頃は……

俺は深い闇の中をさまざまに迷っていた……。

「父さんと母さん、遅いな……」

季節の変わり目、秋から冬へと移行する微妙な気温の時の事だった。外に出れば思わず足を動かしたくなる程の寒さだが、浦方マモロウが動き回ってそわそわしているのには別の理由があった。

マモロウを他の視点で見ると、誰もがぎこちなく思えるであろう。

と言うのも、今日は彼が18になる誕生日で、NAXAで科学者として忙しい彼の両親も、今日だけは……と彼の下へ帰って来る予定だからだ。

「まだかな……」

徐々に父と母に会えるのでなかなか落ち着かない。

マモロウはふと時計をみる。

二十一時……。

約束より、一時間の遅れ……。

今年は無理か……そう彼が諦めかけていた時だった。  
ピンポンと、高いトーンでインターホンがなった。

「父さん達だ……！」

喜びを隠せずに、マモロウは直ぐに玄関先に飛び出す。

まだまだオレも子供だな……自分で軽く苦笑しながらもドアを開けた。

しかし、目前に現れたのは意外な顔だった。

「マモロウ君……！」

「あ、あれ……？ 西園寺さん……？」

西園寺ユウト……彼は浦方博士、即ちマモロウの父と母の助手である。

ユウトは恐らく走ってきたのだろう、肩を揺らして荒い呼吸を繰り返している。

そして軽く呼吸を整えると、一変し、真剣な表情でマモロウを見る。

「ど、どうしたんですか……?」

マモロウも、何かあったのかと悟り、ユウトに聞く。

「……お、落ち着いて聞いてくれ」

「……?」

ユウトはマモロウの肩に両手を乗せ、事の有り様を話した。

「……浦方博士が……亡くなった……」

「……ははっ！ な、何言ってるんですか西園寺さん。冗談きついですよ」

マモロウは引きつった微笑を浮かべて西園寺を見たが、西園寺は少し下に俯いた。

暫しの沈黙が空気に張り詰める。

そして、西園寺はこう切り出した。

「マモロウ君……。何も言わずに付いて来てくれ……」

マモロウの手を掴み急いで玄関を出る。

「ちょ、ちょっと！ 西園寺さん……！ な、何を……!」

その時、西園寺の瞳に一際光るものが見えた。

……涙……？

その瞬間、マモロウは抵抗する力が抜け、連れられるようにして家を出た。

- NAXA 日本支部 -

「……そ、そんな……！」  
一面赤一色……。

その光景はマモロウにはあまりにも酷だった。

「う……嘘だ！ 父さんと母さんが……」

切り刻まれた体、人間とは思えない量の鮮血……。

だが、マモロウはそれが誰かなんていうのは一瞬で分かった。

18年間、会いたくても会えない両親の顔。  
それがこんな形で目にするとは……。

マモロウは泣いた。

泣き続けた。

背後には悲観の表情を浮かべたNAXAの人間がいたが、今は至極  
どうでもいい。

## 第2章 決意（前書き）

1章は、話を追加しているので読んでない方は先にそちらをお読みください

## 第2章 決意

その日、葬儀が行われた。

勿論、浦方夫妻の……。

マモロウとその親戚、彼らと親しかった者だけという小さな式は、マモロウの希望での事だった。

「マモロウ君……」

式が終わり、式場を出た所で西園寺がマモロウの肩にそつと手を添える。

気を使ったのか、西園寺はすぐにマモロウに背を向けて歩き出した。

「……悲しくなんかありませんよ」

「……え？」

雨が多少なりと降っていたが、西園寺にははっきり聞こえた。

マモロウは西園寺に背を向けたまま、ゆっくりとした口調で話し出す。

「……あの人達、オレからしたら自由人なんです。……科学者とかなんだか知らないですけどね……誕生日まで息子の事ほったらかして、自由にも程がありますよ！……ただ……」

「ただ……？」

ただ……。

マモロウの脳裏を横切る光景。

それは“科学者”としての姿ではなく、紛れもない“両親”としての姿だった。

「……ただ、それでもオレにとっては……世界一の両親でした……  
！！」

一瞬、西園寺にはマモロウが輝いて見えた。

そう、それはまさしく……。

「……そうか、そうですよね……西園寺博士……」

……雨が止み、マモロウは歩き出した。

「父さん……母さん」

空は晴れ、鳥はさえずっている。

まるで、マモロウの決意を後押しするかのようだ。

「オレが必ず……敵をとる！」

その時のマモロウが、西園寺にはマモロウの父ダイスケの姿に見え

た。

### 第3章 いつもの日常（前書き）

大変遅くなりました

### 第3章 いつもの日常

「うーん……もう朝か……」

心地いい日差しがマモロウに朝を告げる。

「朝ご飯の準備しなくちゃ」

マモロウは慌ただしく階段を降りていく。

それもそのはず、今日から3日ぶりに学校に登校するからである。

慣れた手つきでちゃっっちゃっと朝食を作り終わったマモロウは、急いで食事と着替えを済ませ家を飛び出していった。

待ち合わせ場所の公園には体格のいい少年と小柄な少女がいた。

「マモロウ!!遅えぞ!!」

荒っぽい口調で少年はマモロウに怒鳴り付ける。

この少年は星河大吾。

マモロウとは幼稚園からクラスもずっと同じ。マモロウとは長い付き合いだ。

「アンタも対して変わらないでしょ。」

こちらの少女は響ユイナ。

最近コダマタウンに引越して来たのだが、なぜかマモロウ達と気が合い共に行動している。ルックスもよく学校のアイドル的存在でケンカも強い。

「うるさい!! さっさと学校に行くぞ!!」

大吾が怒って1人歩いていく。

2人はそれを見て、顔を見合わせ笑っている。

いつもの日常に戻ってきたマモロウは、とても嬉しそうだった。

## 第4章 それぞれの道

放課後……

いつも通り3人で帰っていると、大吾から思いもしない言葉が出てきた。

「俺達、いつまでこうやって3人でいられるんだろう……」

「はは!! 似合わな!!」

「ちょっと柄じゃないんじゃないの」

「……」

からかっても大吾は黙ったままだ……。  
どうやら本気らしい。

「俺はNAXAの試験を合格している。仕事が始まるところで3人でゆつくり話す機会も少なくなるかもな。お前らは進路はどうするんだ?」

「私は大学に進学するけど、マモロウは?」

「俺は……」

父さんと母さんの仇をとりた……。でも、言えない……。

「テレビ局で仕事をしたいな」

本当のマモロウの将来の夢なのだが、今は内心どうでもよかった。

「まあ、お互いに頑張ろうな。おっと、もう家に着いたか。また明日な」

「バイバイ」

「……」

大吾と別れた後、しばらく無言が続いた

「ねえマモロウ……」

「……」

「マモロウ……!!」

「何？」

「どうしたの？いきなり黙りこんで」

心配してユイナが声をかけてきたが、今は話す気にもなれなかった……。

「別に……ただ考えごとをしてただけだよ」

「困ったことがあったらいつでも相談してよ」

「ああ、ありがとう」

「じゃあ、私こっちだからまた明日ね」

「うん、じゃあね」

大吾もユイナも気をつかってくれていたようだ。

マモロウも家に着きドアを開けると、

プルルル……プルルル……

電話が鳴りだしたので、マモロウは急いで電話を手を取った。

「はい、浦方ですけど……」

「マモロウ君、西園寺だが……」

「どうしたんですか？」

心配して電話してきたのかと思った。

「今すぐNAXAに来てくれないか？」

「父さんと母さんのことが何かわかったんですか!?!」  
声を荒げてマモロウは問いかけた。

「いや、残念だがまだ何も……」

「そうですね……」

一気に全身の力が抜けていった。

「君に渡す物があるんだ」

「……？分かりました。すぐ行きます」

正直、自分でもよく分からなかったが、今NAXAにいけば一歩前に進めると、そんな気がしていた。

## 第5章 両親の形見

NAXA日本支部……

マモロウは、西園寺が用意した迎えのへりで到着した。

「やあ、マモロウ君。急に呼び出してすまない」

入口には西園寺が出迎えていたが、マモロウにはその言葉さえ届いていなかった……

ハア……ハア……

不意に冷たいものが額に滲む。  
それに、上手く空気が吸えない。

ズキン！！

「つつ……」

頭に、激痛がはしる。

マモロウの脳裏に、あの日の悲劇が蘇る。

トラウマとして残るのも仕方がないことだった……

「マモロウ君、しっかりするんだ！！」

マモロウの異変に気づいた西園寺が、あわててマモロウのそばに向かう。

「大丈夫です……」

マモロウはそう答えると、一歩ずつ歩き出したが、上手く歩けてない。

「しかし……」

「こんなことで立ち止まっていたら、いつまでも前に進まないんだ！……」

迷いのないまっすぐな瞳は、マモロウの父浦方コウにそっくりだった。

「……わかった。ついて来てくれ」

サテラポリス研究室……

マモロウが案内された研究室は、見たことのない機械だらけだった。一体、この機械を何に使うか聞きたかったが、他の科学者は洗脳されたかのように黙々と働いていたので、話しかける勇氣は、マモロウにはなかった……

「ヨイリー博士、マモロウ君を連れてきました」

マモロウは、50歳くらいの老婆のもとに案内された。どうやら科学者の中で一番偉い人らしい。

「貴方がマモロウちゃんね」

「はい」

「貴方をここに呼んだのは、コウちゃんとシズナちゃんの形見を渡すためのなの」

「父さんと母さんの形見……」

感情を抑えられずに思わず涙目になる。

「本当は貴方の誕生日に渡すみたいだったんだけど……こんな形で渡すことになるのわね……」

声がかすれる。

ヨイリーの目も涙が溢れていた。

「じゃあ渡すわね」

「これは？」

それは見たことのない生き物で、まるで小さな天使のようだった。

「これはゴッドと名付けられた電波体よ。コウちゃんとシズナちゃんが開発したの」

マモロウは試しに声をかけたが、返事がない。  
どうやら寝ているらしい。

「ゴッドは普通の電波体と違って目で見えるし、マモロウちゃんと一緒に成長するの今はまだ、赤ちゃんの状態と言えはいいかしら」

「まるでゲームの世界だな」

育成ゲームをよくプレイするマモロウにとっては、ちょっとうれしい事だ。

「とりあえずトランサーに移すから、マモロウちゃん、トランサーとカードフォース持つてる？」

「持ってますけど……」

カードフォースが光に包まれた後、ゴッドはその場から消え、トランサーの中で眠っていた。

「これで貴方は電波変換ができるわ。あなたが電波化する事ができるの」

話しを聞いてもいまいちパツとしないが、聞くよりやってみたほうがいいと踏んだマモロウは、早速電波変換してみることにした。

「電波変換!!」

浦方 マモロウ、  
オン・エア!!」

……何も変化がない。

あんなにかっこよく決めたのに……今となっては、恥ずかしさだけが残る……

西園寺は見てみぬふりをしていて、ヨイリー博士は、にやけている。一刻も早くこの場から逃げ出したい……

「やはり、電波変換はまだ無理のようね」

知っていたかのような口調だ。

この老婆に殺意が沸いてきたが、まあ今回は許してあげた。

「じゃあ、ここからが大事な話だからよく聞きなさい」さっきまでと表情が一変している。

「コウちゃんとシズナちゃんの遺言よ。……ゴツドを狙っている組織がある。ゴツドを守るのは、マモロウだけだ。ゴツドを生かすのも、殺すのも、マモロウ次第だ。何事にも動じない、強い心を持って」

「……その組織が父さんと母さんを殺したんですか？」

感情を押し殺して、声が震えている

「可能性が高いわね」

「分かりました。何か解ったら教えてください。それじゃ、僕は帰ります。」

マモロウの姿が見えなくなった後、西園寺が口を開いた。

「大丈夫ですかね？」

「マモロウちゃん一人で何でも背負い込まなければいいけど……」

ヨイリーも西園寺もやはり心配だった。

その頃……

「浦方マモロウが、ゴッドを得ました。」

「そうか。計画通りだな。お前は浦方マモロウの高校に教育実習として潜り込め。そして、ゴッドの力を目覚めさせるんだ」

「了解しました」

## 第6章 想い

数日後……

いつもの集合場所で、大吾とユイナがマモロウを待っている。

「マモロウ、遅いね」

「あの野郎、一発ぶん殴ってやる!!」

数分後……

「お、お早う……」

「遅いぞ!!…マモロウ……っ、うお!!」?

マモロウの顔がとても曇れている。  
とても見るに耐えない状態だ。

「一体、どうしたの!?!」

「いや、こいつが夜泣き出して全然眠れなくてさ……」

トランサーの中で心地良さそうに眠っているゴッドに指を指して言った。

この可愛らしい寝顔も今じゃとても憎たらしい。

「何これ!?!めっちゃかわいい!?!」

「なんだ？俺にも見せる！！」

大吾がトランサーに顔を近づけた途端、

「キュワー！！」

ゴッドが勢いよく泣き出した。

「そんな敵つい顔近づけたら、誰だって怖いよ」

「ろくな父親になれないわね」

大吾に、手厳しい言葉で集中攻撃する。

「うるせー！！早く学校にいくぞ！！」

大吾は、顔を真っ赤にして一人歩き出す。

「待てよ！！」

「相変わらず、大吾は短気ね」

マモロウは、ユイナに、ゴッドの話しをしながら、大吾の後を追った。

コダマ高校……

コダマ高校は、コダマタウン唯一の高校なので、大抵、皆ここに進学する。

クラスは一学年、A、B、Cの三つ存在する。

マモロウ達、三人は3 - Aである。

「ふう、ギリギリ間に合ったな」

マモロウ達が、教室に入ると、何やら騒がしい。

「ねえ、聞いた？今日から、教育実習生が来るんだって!!」

「本当!?カッコいい人だったらいいな」

「しかも3・Aの担当だって!!」

教室はこの話題で持ちきりのようだ。

「教育実習生？」

マモロウが問いかける。

「聞いた話だと、今日から来るらしいよ」

ユイナが答える。

「ふーん、何でそんなので、皆騒ぐんだろっね」

マモロウは、大人目線だ。

「けっ、面倒くさいな」

大吾が不機嫌そうに言った。

そんな会話をしていると、

キーン コーン カーン コーン……

ホームルームの、始まりを告げる鐘がなった。

「さて、ホームルームを始めるぞ」

担任の、沢田タキ先生だ。生徒にとっても優しく、学校で一番に評判のいい先生だ。

「今日から、教育実習の先生が来るから、皆、仲良くするんだぞ」

「じゃあ、入って来てください」

皆、楽しみにしていたが、一瞬で期待を裏切った。

「……今日から二週間、お世話になります……小宮アズマです……教科は化学です……皆さん、よろしくお願いします……」

ぼそぼそしゃべって聞き取りにくい、しかも髪は油でベタついて、髭は伸び放題、眼は細く眼鏡を掛けている。とても教育実習生には見えない。どう見ても危ないオッサンだ。

「じゃあホームルーム終わり」

タキ先生が出ていくと、

「うわあー……」

「嘘だろ……」

「一時間目、化学だろ……」

「マジかよ……」

皆の悲痛な声が教室中に響く……

一時間目……

「……今日は、化学の原田先生が出張でいらっしやらないので、私が授業をします……」

事態は更に悪化した。

皆もつやる気すらなかった。

「……今日は、実験をします……」

実験内容は、よく分からない草を磨り潰して、水と混ぜ合わせ、加熱する。

いたって簡単だ。

「……皆さん、出来ましたか？……ではそろそろ……毒が発生します……」

「え？」気づいた時には、もう遅かった……  
息をするのが苦しい……

「……これはすぐ広がる毒なので、もうすぐ学校中に広がります……  
…毒自体はそこまで強くないので、すぐには死にません……すぐに  
はね……」

意識が朦朧としている……マモロウ以外の人は皆倒れている。  
マモロウも限界だった。

ここで死ぬかもしれない、だが、死んだら誰が父と母の仇をとる。  
まだ死ぬわけにはいかない……  
そんなことを想っていると、

「マモロ……ウ、良かった……た。まだ……意識はあるの……ね。あ  
なただけでも……逃げ……て……」

微かに意識があったユイナは、そう言い残すと、倒れた……

「ユイナ……」

そうだ……もう、自分しかない……この状況を乗り切るには、全  
て僕にかかっている……しかし、僕には、皆を守る力はない……  
僕に、僕に力が有れば……皆を守るだけの力が有れば……！

そう強く想った時、マモロウのトランサーが輝き出した……！

## 第7章 闇の使者

「何だ……この光は？」

視界が霞んでいる状態でもその光は鮮明に見える。

まもなく、光が失われた後、

「マモロウ大丈夫か？」

「お前……ゴツドなのか？」

つい先程まで赤ん坊のような状態だったゴツドの事を考えると、想像もつかない姿である。

大きさもマモロウの腰ぐらいいまで大きくなっており、まだ未熟な羽が生えて、頭に天使の輪がついている。顔こそまだ幼いが、とても穏やかな目をしている。

「今のままじゃ危険だ、マモロウ、電波変換をするんだ」

「電波……変換……」

その名を聞くだけで前回の失敗を思いだし恥ずかしいが、そんなこととは言ってもらえない。マモロウは微かな意識の中、トランサーにカードフォースを差し込んだ。

「電波……変……換

浦……方マモロ……ウ

オン・エ……ア」

その瞬間、光がマモロウを包みこむ。

「うーん……一体何が起きたんだ……って何だこの姿!？」

マモロウは制服を着ていたはずなのに、あちこちに装飾が付いた全身タイツみたいなものを着ている。

靴はとても固い長靴のようなものを履いており、頭はヘルメット?のようなものを被っていて、その頭には輪が浮いている。背中には翼が付いている。

「その姿が電波変換した姿だ」

「ゴツド!?!どこにいるんだ?」

「ここだ」

声ができる方をたどってみたら、頭の上を浮いている輪にたどり着いた。

「あれ?さっきまでの苦しさが全く無い?」

先程までの死にそうな程の苦しみが、嘘のように無くなっていた。

「それはお前自信が電波化しているからだ」

「そうだ、皆を助けないと……」

マモロウが動こうとした瞬間、  
パチパチパチパチ……

「見事な電波変換でしたね……浦方マモロウ君……」

小宮アズマが不適な笑みを浮かべ拍手をしている。  
見ているだけで鳥肌がたちそうだ。

「答える!!お前は何者だ!？」

コイツが父さんと母さんを殺した奴かもしれない。  
返答次第ではコイツは僕の手で……

「そうですね……君は見たところ天使、即ち光と例えるなら、私は  
闇、とでも言うっておきましょうか……」

「何!？」

「ほらほら……無駄話をしていると皆手遅れになりますよ?……」

「くっ!?!」

マモロウが振り向いた時、

「では、私はしばし逃げさせて貰いましょうか」

「何!？」

「やりますよメディソン……」

「はい、アズマ様」

アズマの電波体、メディスンが答える。

以下にも薬のカプセルにしか見えない電波体だ。

ゴッドの方が断然カッコいいと、マモロウはつくづく思った。

「電波変換……」

アズマが光に包まれた後、そこに立っていたのは人間ではなかった

……

白衣を着ていて頭は細長く、頭の上はオレンジ、下は白と半分ずつ色が違って、まるで薬のカプセルのようだ。

しかし、目が細いのは相変わらず変わらない。

「お前は何者だ!？」

「私の名はドクター・メディスン……君と同じ電波化しただけですよ……」

人間の時も不気味なオッサンだったが、電波化しても相変わらず不気味だ。

「じゃあ私はこれで……」

そう言い残すと、ドクター・メディスンは黒板の中に消えていった

……

「消えた!？」

「いや、黒板の電脳世界に行ったんだ」

「電脳世界？」

「いわゆる電波の世界だ。とりあえず、今は毒が発生してるあの液体を流してしまっぞ」

「分かった」

全て流した後……

「私達も黒板の電脳世界に行くぞ」

「どうやって行くの!？」

「マモロウ、私はおウェーブロードを通らなくても、前が黒板に触れれば行ける。」

「ウェーブロード?」

「その話はまた今度だ。行くぞ」

マモロウが黒板に触れた瞬間、

「うわぁー!?!」

何と、マモロウは勢いよく黒板の中に飛んで行ってしまった!!

黒板の電脳<sup>1</sup>……

「うわぁー!!ここは!?!」

そこには見たことの無い風景だった。

「ここが電腦世界だ。さあ、奴を追っぞ」  
しばらく進むと、

「変な生き物がいる!?!」

そこには水色の変な生き物がいた。

「僕はデンパ君、ここからは薬を調合しなければ道が開きません」

「薬ってこれか……」

そこにはフラスコと赤、青、黄、緑、紫の液体が置いてあった。

「黄、赤、青の順でフラスコに液体を入れてください」

マモロウは言われた順に薬を調合した。  
すると……

何と、道が出現した!!

「次行くぞ!!」

黒板の電腦?……

しばらく進むと、またフラスコと、液体と、デンパ君がいた。

「緑、青、黄、赤の順でフラスコに液体を入れてください」

マモロウはまた言われた順に薬を調合した。  
すると……

また道が出現した!!

「急ぐぞ!!」

黒板の電脳3……

先進むと、やはりいつものセットがあった。

「赤、黄、緑、青、紫の順にフラスコに液体を入れてください」

マモロウはまたまた言われた順に薬を調合した。

すると……

道は出現した、だが……

「コイツらは敵か!？」

出現した道に、三体ヘルメットを被った奴らが立ちはだかる。

「コイツらは電波ウィルスのメットリオだ。マモロウ、やるぞ!!」

「どうやって!？」

モタモタしている内にメットリオが衝撃波を放つ。

「うわぁ!？」

「マモロウ、飛ぶんだー!!」

マモロウは飛んでギリギリ回避した。

「危なかった……って、僕空飛べるんだ!!スゲー!!」

「感心している場合か!!マモロウ、羽を一本抜け」

ゴツドの言われた通り羽を一本抜くと、シュワーン!!と音が鳴って羽が剣になった!!

「カッター!!」

「ウイングソードだ。マモロウ、行くぞ!!」

マモロウは空から勢いよくメットリオに突進して、次々と斬り倒していった。

「初めてにしては上出来だな」

ゴツドも満足そうだ。

「緊張したけどね……」

マモロウの足が震えてる。

「よし、行くぞ」

しばらく進むと……

「見つけたぞー!!」

「おやおや……ここまで来るとは……」

最深部でついに、ドクター・メディスンを発見した。

「一つ聞いていいか。僕の両親を殺したのはお前か？」

もはや、マモロウの頭には復讐の二文字だけだった。

「真実にたどり着くには、まだ早すぎますよ……でも、君は真実にたどり着く前にここで散ることになりますけどね……」

「言いの残すことはそれだけか？」

「マモロウ、落ち着け!!」

ゴッドの言葉もマモロウの耳には届いていない……

「来なさい……ここをあなたの血で染めてあげる……」

「覚悟しろ……お前はここまでだ」

今、闘いの火花が切って落とされる!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4994i/>

---

流星のロックマン ~ Mamoro's STORY ~

2011年2月3日02時46分発行